



TITLE:

マクルスの謂ゆる社會的意識形態 について (特別號)

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. マクルスの謂ゆる社會的意識形態について (特別號). 經濟論叢
1926, 22(1): 128-141

ISSUE DATE:

1926-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128360>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十二卷 第一號

大正十五年一月一日發行

特別號

重複課税の本質……………法學博士 神戸 正雄

米穀關税と輸出地の米價……………法學博士 河田 嗣郎

世界經濟の成立過程……………法學士 作田 莊一

清酒庫出税と租税の立替……………法學士 沙見 三郎

西陣の補助業に就て……………經濟學博士 本庄榮治郎

商品の萌芽形態に於ける社會的性質……………經濟學士 谷口 吉彦

マルクスの所謂社會意識形態に就いて……………法學博士 河上 肇

朝鮮產米増殖計畫と世論……………法學博士 山本美越乃

家産制度の利弊……………經濟學士 八木芳之助

海運に於ける表定運賃の特質……………法學士 小島昌太郎

（禁轉載）

マルクスの謂ゆる社會的意識形態について

河 上 肇

マルクスの唯物史觀の公式——經濟學研究の結果、『私が得たところの、さうして一旦これを
得た後は、私の研究の導きの絲となつたところの、一般的結論は、簡単に次の如く公式化し得
る』といふ書き出しのもとに、彼れの書き現はせる唯物史觀の公式——の第一節には、次の如く
述べてある。

『人類は、彼等の生活の社會的生産において、一定の、必然的の、彼等の意志から獨立した關
係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に順應するところの生産關係に、入り込む。
これら生産關係の總和は、その上に法律のおよび政治的上層建築が立つところの、且つそれ
には一定の社會的意識形態が順應するところの、現實の土臺たる、社會の經濟的構造を形成す
る。物質的生活の生産方法は、一般的に、社會的の、政治的の、および精神的の生活過程を制
約する。人類の意識がその存在を規定するのではなくて、むしろ之に反し、彼等の社會的存在が
その意識を規定するのである』。

私が今この論文において主たる問題とせんとするところは、以上の一句にいふところの『社會的意識形態』とは何であるか、といふ點にある。

最も廣く行はるゝ見解によれば、社會の經濟的構造といへる現實の『土臺』の上に、先づ法律のおよび政治的の『上層建築』が立てられ、更にその上に、言はば第三階として社會的意識形態が立てられてゐる、と解釋されてゐるやうである。（かゝる解釋を取る者は、公式の後の部分に現はるゝところの、『經濟的基礎の變動に伴うて、どえらい上層建築の全部が或は急激に或は徐々に變革する』といふ一句のなかの『上層建築』を以て、法律のおよび政治的の上層建築以外のものをも含むとす）。自然、社會的意識形態とは、公式の後の節にいふところの『法律的、政治的、宗教的、藝術的、または哲學的の、簡單に言へば、觀念的の諸形態』と同一視せられる。ところで私はこれと稍々異つた見解を有つ。私の見るところによれば、社會的意識形態の或るものは、（私は假にその或るものを經濟的意識形態と名づける）、現實の土臺たる社會の經濟的構造と分離し得べからざる連絡を有つ。それは土臺のなかに織り込まれてゐる。この土臺の上に、先づ法律のおよび政治的の上層建築が立ち、更にその上に、第二の上層建築として——従つて土臺からは可なり懸け離れた空中に——經濟的意識形態が聳えてゐるわけではない。（もしさうであるならば、公式は、『その上に法律のおよび政治的の上層建築が立つところの、且つそれには、一定の社

會的意識形態が順應するところの』と言つた風に、後者に關する語格を特に變へなかつたであらう。かくて私の見るところによれば、現實の土臺たる社會の經濟的構造の研究は、同時に、社會的意識形態の或る主なるもの、研究となる。前者の研究は即ち後者の研究である。

マルクスはその『經濟學批判』において、またこの著作の繼續とも見るべき『資本論』において、『資本家的生産方法ならびに之に順應せる生産關係および交易關係』を、即ち資本家的社會の『現實の土臺』たる資本家的の『經濟的構造』を、研究した。もし先きの一句に對する私の解釋が當つてゐるならば、『經濟學批判』または『資本論』においては、當然に資本家的社會の意識形態が論せられてゐなければならぬが、事實は果して何うであらうか？

私の見るところによれば、『經濟學批判』および『資本論』の兩書とも、或る意味においては全然、資本家的社會の意識形態の研究から成る。しばらく之を『資本論』について見るならば、その主題たる資本、そのものが、一定の、歴史的の、社會的意識形態である。資本家はみづから何百萬、何千萬圓の資本を有つと意識してゐる。彼が所有するところのものは、實は工場であり機械であり原料であるにしても、彼れ自身は何百萬、何千萬圓の資本を有つと意識してゐる。彼に雇はれてゐる勞働者もまた、彼を以て何百萬、何千萬圓の資本主であると意識してゐる。即ち資本は、資本家的生産方法の支配せる社會に存在するところの、最も主な社會的意識形態の一つであ

る。それは富める者も貧しき者も、教養ある者も無學文盲の者も、老人も子供も、苟くも資本家的社會に住める者ならば、みな共通に有つてゐるところの、最も『社會的』な意識形態の一つである。かゝる意識形態は如何にして生産されたか？ それは資本家的生産方法——資本家的なる『物質的生活の生産方法』——を考究することにより、始めて理解され得る。かゝる意識の内容は如何に發展するか？ それは資本家的生産方法の下における『物質的生産力の一定の發展階段に順應するところの生産關係』の發展を考察することにより、始めて理解され得る。『ニグロ』はニグロ¹⁾だ。ただ彼は一定の状態のもとに始めて奴隷となる。紡績機械は絲を績む機械だ。ただそれは一定の状態のもとに始めて資本となる。これらの状態から切り離れたならば、金^{カネ}がそれ自身において貨幣でないやうに、また砂糖は砂糖の價格でないやうに、それは少しも資本ではない。……資本もまた一の社會的生產關係である。それはブルジョア社會のブルジョア的生產關係である¹⁾。一定の物はかゝる生産關係のもとに置かるゝことにより、言ひ換ふれば、人が物を通して一定の生産關係を結ぶとき、その物は始めて資本となるのであり、それと同時に、資本といふ意識が人間の頭のなかに宿るのである。だから資本なる意識ならびにその意識内容の發展は、資本家的なる生産關係の成立ならびに發展に順應するのであり、従つてこれが理解は、かの資本論——『事物がそのもとに包括さるゝところの、定義を問題とするのでなく、一定の範疇に表現

1) Lohnarbeit und Kapital, (一九二五年改版, 拙譯本, 32, 34頁)

さるる一定の機能を問題とする』²⁾ところの資本論——の全卷に亘る研究を必要とするのである。

『資本はただに生活資料、勞働具および原料からのみ成り立つのではない、ただに物質的の生産物からのみ成り立つのではない、それは同時にまた、交換價值から成り立つ。これを構成する總ての生産物は商品である。だから資本は、ただに物質的生産物の一定量であるばかりでなく、それは商品の、交換價值の、社會的の大きさを有つたもの、一定量である』³⁾。だから資本の運動の、資本家的社會の生命運動の研究は、『商品の分析から始まる』わけであるが、この商品の分析においても、吾々は、一定の物は一定の生産關係のもとに置かるゝがゆへに商品となり、商品價值を有つのであり、従つてまた、吾々の頭のなかにも、商品または價值といふ意識が生ずるのであるといふことを、明白に知り得る。一定の商品例へば金が、特種の商品たる貨幣となるのも、同じことである。『金はそれ自身において貨幣ではない』、それは一定の社會關係のもとに置かれて、始めてみづから貨幣となり、人の頭のなかに貨幣なる意識を生産する。商品、貨幣、價值、價格、これらは皆な商品生産社會における生産關係の表現であり、同時に商品生産社會に存在する社會的な意識形態である。一定の使用價值物——例へば米——は、吾々の社會においては同時に商品であり得るが、ロビンソン、クルーソーの孤島においては、それは如何にするとも商品とはなり得ない。或物が商品となるためには、他人の所有物と對立せねばならぬ。Aなる物の

2) Das Kapital, II, S. 197.

3) Lohnarbeit und Kapital, (同上, 35頁)

所有者とBなる物の所有者とが其等の物の交換を媒介として社會關係を結ぶ時、それらの物は始めて商品となるのであるから、孤島に孤立せるロビンソンにとつては、米は同じ米でも商品とはなり得ない。たとひ彼が難船の折一定の金貨をポケットに携へてゐたとしても、それらの金貨は、彼が孤島に這ひ上がった刹那から、貨幣たる性質を失つて仕まふ。商品もなく貨幣もなき所に、物が商品としての價值または價格を有し得ないのは、言ふまでもない。しかるに吾々が現に住む社會においては、殆ど總ての生産物が商品化されてゐるが故に、Aなる物のx量は壹圓に値し、Bなる物のy量は拾圓に値するといふやうに、殆ど總ての物が、商品としての價值または價格を有つ。従つて斯かる價值觀念もまた、最も普遍的な社會的意識形態の一に屬する。富める者も貧しき者も、教養ある者も無學文盲の者も、老人も小供も、苟くも商品世界に生活する者は、みな、一定の物が全何圓に値するといふ意識を有つ。一定の意識形態が常に一定の生産關係に順應してゐるといふことは、吾々が資本論を繙くことにより、章を追うて理解し得るところである。

試に今一つの例を資本論の第三卷から引くならば、吾々は、剩餘勞働が資本家的社會にあつては利潤なる現象形態を有ち、それに順應して、資本家的社會には利潤なる意識形態の存在することを知る。封建的な社會關係のもとにおいては、被搾取階級の剩餘勞働が年貢といふ現象形態を有つたから、それに順應して年貢といふ社會的意識が存在したのであり、資本家的な社會關係

のもとにおいては、賃労働者階級の剩餘労働が資本に對する利潤といふ現象形態を有つから、それに順應して、吾々の頭のなかにも利潤といふ意識が生まれるのである。だから、剩餘價值の利潤への轉化を必然的ならしむる生産關係の解剖は、同時に利潤なる意識形態の成立過程の解剖となる。『吾々が本卷(資本論第三卷)において展開するところの資本の諸容姿は、それが社會の表面の上に、……また生産當事者の通例の意識のうちに、現はれ來たるところの形態に、一歩づゝ近づく』。

『人間の意識がその存在を規定するのではなく、むしろ之に反し、彼等の社會的存在がその意識を規定するのである』。唯物史觀の眞髓ともいふべき此の見解は、經濟學の研究により、——即ち商品、貨幣、資本、價值、價格、利潤、等、等の意識形態が、如何に『人間がその生活の社會的生産において入り込むところの生産關係』に順應して規定さるゝかを研究することにより、——始めて『自然科學的に忠實に確定』され得る。だから唯物史觀は、マルクスにとつては、經濟學研究の結果始めて得たところの一般的結論である。

『社會的意識形態』を以て、『法律的および政治的上層建築』の上に位するところの、第二の上層建築となす論者のうちには、マルクスの『經濟學批判』および『資本論』を以て、純經濟過程の研究

究に止まるものとなし、社會的意識形態の研究に至つては、マルクスの遂に全く着手するに及ばざりしところだ、となす者がある。私はその最近の一例として福本和夫氏の論文を引くであらう。氏の論文『經濟學批判のうちにおけるマルクス資本論の範圍を論ず』には、『近代有産者社會』を次の如き過程に分析してある。⁵⁾

第一段 純經濟過程

第二段 國家過程(政治過程)

第三段 意識過程

第四段 國際過程

さうして氏のいふところによれば、『資本論において彼(マルクス)がその實際に取扱はんとし、また取扱へる所は、……私(福本和夫氏)の所謂資本家的生産の純經濟過程の範圍を出でないもの』である。前表において意識過程が國家過程と國際過程との中間に挟まつてゐるのは、如何なる理由に基づくか、私の理解し得ぬところであるが、少くとも氏の意識過程が何を指すかは、『有産者(有産者のみか?——河上)はその社會的意識形態を有する。——私(福本氏)の所謂意識過程』といへる氏の説明によつて、これを知り得る。さうして、この意識過程は——社會的意識形態は——經濟過程から遊離されて、第二の上層建築を成すのみならず、それはマルクスが資本論で取扱つ

た問題の範圍外に横はつてゐる、とふのである。けれども、私の見るところによれば、斯様な解釋は、マルクスの經濟學の最も太切な決定的特徴に對する盲目を裏書するものに外ならぬ。マルクスがその經濟論において最も重きを置きたるところは、人と人との生産關係が彼等の物質的生産力の一定の發展階段に順應するといふことと、社會的意識形態が一定の生産關係に順應するといふことと、この二つである。この二つの根本的見解が、彼れの經濟學を、彼れの謂ふところのブルジョア經濟學から區別する。これを當面の問題について言へば、彼は商品、貨幣、資本、價值、價格、利潤、等、等の社會的意識形態が、如何に一定の生産關係に順應しつゝあるやを論證することにより、一般的に「人間の意識がその存在を規定するのではなく、むしろ之に反し、彼等の社會的存在がその意識を規定する」といふことを論證してゐるのである。それは資本論の全卷を擧げて論證してゐるところであるにも拘らず、意識形態の問題は資本論の範圍外に横はるなどいふ説の生ずる所以は、論者が商品、貨幣、資本、價值、等、等を以て、物または物の自然的性質であると解してゐるからである。それらのものを物または物の性質だと思ひ込んでゐるから、マルクス自身はそれらのものが皆な一定の生産關係に順應するところの歴史的な意識形態であることをこそ力説してゐるのだけれども、意識の問題は研究の範圍外に横はると見えるのである。

論者のいふところが如何にマルクスの精神に反するかは、『經濟學批判』の外形からでも證明さ

れ得る。何故といふに、この書に論じてあるところは、商品および貨幣(價值と價值形態)に過ぎない。しかるにも拘らず、この書の序文に、吾々が茲に問題とするところの唯物史觀の公式が載せてあるのは、商品および貨幣に關する範圍だけの經濟論においても、吾々は明瞭に、商品價值なる意識形態が商品生産といふ特殊の歴史的な生産關係に順應するものだといふことを、理解し得るからである。なほまた、マルクス自身、唯物史觀の公式の前書きにおいて、彼がかゝる見解に到達したのは、經濟學研究の結果だと言つてゐる。それを見ても、唯物史觀の徹底的理解は、彼れの經濟學に對する理解を前提とすることが分かる。さればこそ彼は、その著『經濟學批判』の本文に入るの前、先づその序文に唯物史觀の公式を掲げたのであり、さうして彼れの主著『資本論』は、その第一版の序言の冒頭にいふが如く、先きの著述の繼續に外ならぬ。即ち唯物史觀の公式は、彼が一生の大著に對する序言であり結論である。唯物史觀の公式の冒頭に掲げられたる一句をちりちりばらゝに切り離し、先づ社會の經濟的構造から法律的政治的の上層建築を遊離し、更にまた之に順應するところの社會的意識形態を遊離し、その第一段を純經濟過程となし、第二段を國家過程となし、第三段を意識過程となし、かくてマルクスが資本論において取扱へるところを以て『資本家的生産の純經濟過程の範圍を出でないもの』となすが如きは、ただに唯物史觀に對する無理解を表白するのみならず、またマルクス一生の著作の主要眼目を全く埋沒

し去るものと謂はなければならぬ。

なほ一言しておくが、『社會の經濟的構造』と『社會的意識形態』とを切り離すことが誤謬であると同じやうに、『社會の經濟的構造』とその上に立つところの『法律のおよび政治的上層建築』とを切り離すのも、また誤謬である。第一段に純經濟過程があり、第二段に國家過程(政治過程)があり、さうして資本論の研究は純經濟過程の外に出でずと説くが如きも、また誤謬である。マルクスは唯物史觀の公式の後の節において、『生産關係、またはただ之に對する法律的表現に過ぎざる所有關係云々』とも言つてゐる。生産關係と法律關係とは、ちりぢりばら／＼のものではない。資本論の第一卷第一篇に扱はれてゐる商品、——それは生産物に對する私有權なくして考へ得べからざるものである。商品と商品との交換、——それは一人の商品所有者と他の商品所有者との間における法律行為に外ならぬ。同じく第一卷の第三篇以下に取扱はれてゐる資本の生産關係、——それは資本家による生産手段の獨占的所有(即ち法律關係)、および資本家と勞働者との間における雇傭關係(即ち法律關係)を離れては、存在し得ないものである。進んで資本論の第二卷を見るに、そこに取扱はれてゐるものは資本の流通過程であるが、これは専ら賣買といふ法律行為によつて營まれる。生産關係と法律關係、經濟行為と法律行為、それらは水と油といふやうに互に離れ／＼のものではない。法律關係の或るものが、その表現するところの生産關係に對す

る關係は、同じ一枚の紙の表と裏との如くである。

唯物史觀の公式の後の部分(私が嘗て第二節第三節と名づけた部分)には、社會の物質的生産力と生産關係とが衝突するやうになると、社會革命の時代が來るといふこと、ならびに『かゝる變革の觀察に當つては、吾々は常に、自然科學的に忠實に確定せらるべき、經濟的生産條件の上に起る物質的な變革と、人類がこの矛盾を意識するに至り且つこれを排撃せんとするところの、かの法律的、政治的、宗教的、藝術的、または哲學的、簡單に言へば、觀念的な形態 (ideologische Formen) とを、區別しなければならない』といふことが述べてある。茲に『觀念的な形態』とは何か? 梶田民藏氏は嘗てこの點に關し次の如く述べられた。⁶⁾

『こゝにマルクスは「觀念的な形態」として、法律的、政治的、宗教的、藝術的、または哲學的といふやうに、その一々の意識の形態を列舉して居るが、經濟的の意識形態はその内に數へられてゐない。しかるに、同じ公式の中には、「これらの生産關係の總體は、法律のおよび政治的上層建築が據つて立つところの、そして、一定の社會的意識の形態がそれに順應するところの、現實の土臺たる社會の經濟的構造を形成する」とあり、この「社會的意識の形態」の中には、經濟思想も、宗教や哲學や法律や政治やの諸思想と同じやうに含まるゝもの

6) 『社會主義は闇に面するか光に面するか』(『改造』大正十三年七月發行、3頁)

と見なければならぬ。して見れば、公式の先きに擧げた箇所において、マルクスは一々の意識形態を列記しながら、何の理由で經濟思想だけを數へないであらうか。かの「觀念形態」と區別せらるべき「物質的に自然科學的に忠實に確定せらるべき生産條件の變革」に關するものは、一定の經濟事實を意味し、經濟思想そのものを意味しない。或は政治思想の中に經濟思想もこめられて居るか云ふに、そうとは思はれない。また無論忘れたわけではあるまい。

問題は、公式の前に出てゐる『社會的意識形態』と、その後に出てゐる『觀念的形態』との關係如何といふ點に横はる。今私の見るところによれば、生産關係に順應するところの社會的意識形態のうち、經濟的の意識形態と看做すべきものは、既に本論文において述べ來つたやうに、商品、貨幣、資本、價值、價格、利潤、等、等を指すのであり、それらの意識形態は全く生産關係と離るべからざる連絡を有つものであるから、それらは人類が生産力と生産關係との矛盾を意識するに到り且つそれを排撃せんとするところの、觀念的な形態のなかには含まれない。だからマルクスは、後にいふところの觀念的諸形態の中から、特に經濟的の意識形態を除外したのである。例へば明治維新のブルジョア革命は、尊王攘夷といふ政治的または宗教的な觀念形態の下に行はれた。それが商品、貨幣、價值、價格といふ類の經濟的意識形態の下に行はれたのではないことは、

言ふまでもない。マルクスはこの場合、明治の革命は尊王攘夷といふ觀念形態から説明さるべきものでなく、當時の生産關係——經濟事實——からのみ説明さるべきものだ、と主張するのである。しかも當時の生産關係——經濟事實——の説明は、それらのものゝ頭腦への反映たる、商品、貨幣、價值、價格、等、等の經濟的意識形態を離れて行はれ得べきものではない。だから經濟事實の解剖は、當然にこれら經濟的意識形態の解剖となるのであり、生産條件の變革は、必然に經濟的意識形態の内容の變革を伴ふのである。これを現代の資本家的社會について考へて見ても、生産關係は刻々に變化するのであり、それにつれて資本なる意識形態の内容もまた刻々に變化する。(例へば資本の最新形態としての金融資本)。それは經濟的意識形態の變化である。ところで、この社會の下における生産力と生産關係との矛盾が意識され且つ排撃さるゝに至るべき觀念形態は、例へば社會主義、共產主義といふが如き政治思想となつて現はれる。さうして、これらの觀念形態もまた、現實の生産關係によつて制約されてゐるには相違ないが、しかしそれは、米一升の價值が金壹圓であるとされるやうな、富める者も貧しき者も、老人も子供も、苟くも今の世に住める者の誰でもが必ず持つてゐるところの、經濟的意識形態とは、全くその性質を異にするのである。